

金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具

～新指定の考古資料～

和歌山県教育庁 田中 元浩
高野山霊宝館 鳥羽 正剛

はじめに

金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具は、史跡金剛峯寺境内及び金剛峯寺遺跡から出土した室町時代から江戸時代にかけての地鎮具及び鎮壇具である。鎮壇は、壇を築く前の供養であり、建物中央部分に設けられた土坑に賢瓶けんびょうを埋納する。また、鎮壇は、壇を築いた後の供養であり、各種の密教法具を埋納するものである。

金剛峯寺境内では、発掘調査によって地鎮・鎮壇具の出土が認められており、真言密教の儀軌を如実に示す重要な考古資料であり学術上の価値が高いことから、平成30年3月に和歌山県指定文化財〔美術工芸品（考古資料）〕に指定された。今回はこれらの出土品について紹介したい。

過去の発掘調査箇所

調査名・調査の原因・種類
1 大門(大門前道路拡幅に伴う発掘調査)
2 大門(大門解体修理に伴う発掘調査)
3 山王院本殿(山王院本殿ほか修理に伴う発掘調査)
4 孔雀堂(孔雀堂再建解体修理に伴う発掘調査)
5 東塔跡(東塔再建に伴う発掘調査)
6 中門跡(中門再建事業に伴う発掘調査)
7 真然堂(真然堂修理及び周辺整備に伴う発掘調査)
8 金剛三昧院客殿及び台所(保存修理に伴う発掘調査)
9 宝性院跡(教化研修道場建設に伴う発掘調査)
10 大衆院跡等(霊宝館収蔵庫及び駐車場建設に伴う発掘調査)
11 尼僧研修道場建設に伴う発掘調査
12 大衆院跡駐車場整備事業に伴う発掘調査
13 国宝「大皇子他115体保存施設建築に伴う発掘調査」
14 高野山大学校舎改築に伴う発掘調査
15 高野山大学松下講堂新築に伴う発掘調査
16 南都銀行高野山支店新築に伴う発掘調査
17 紀陽銀行高野山支店新築に伴う発掘調査
18 防災施設貯水槽新築に伴う発掘調査
19 警察庁倉等建築に伴う発掘調査

指定建造物

名称
A 金剛峯寺徳川家霊台
B 金剛峯寺不動堂
C 金剛三昧院多宝塔
C 金剛三昧院客殿及び台所
C 金剛三昧院経蔵
金剛三昧院四所明神社本殿
D 金剛峯寺山王院本殿
E 普賢院四脚門
F 金剛峯寺大門
金剛峯寺真然堂
金剛峯寺大主殿
金剛峯寺奥書院
金剛峯寺会下門
金剛峯寺かご堀
金剛峯寺経蔵
金剛峯寺護摩堂
金剛峯寺山門
金剛峯寺鐘楼
H 常喜院校倉
I 西南院石造五輪塔
J 遍照光院石造多層塔
K 不動院書院

史跡金剛峯寺境内 金剛峯寺遺跡 国宝 重要文化財 県指定 金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具出土地点

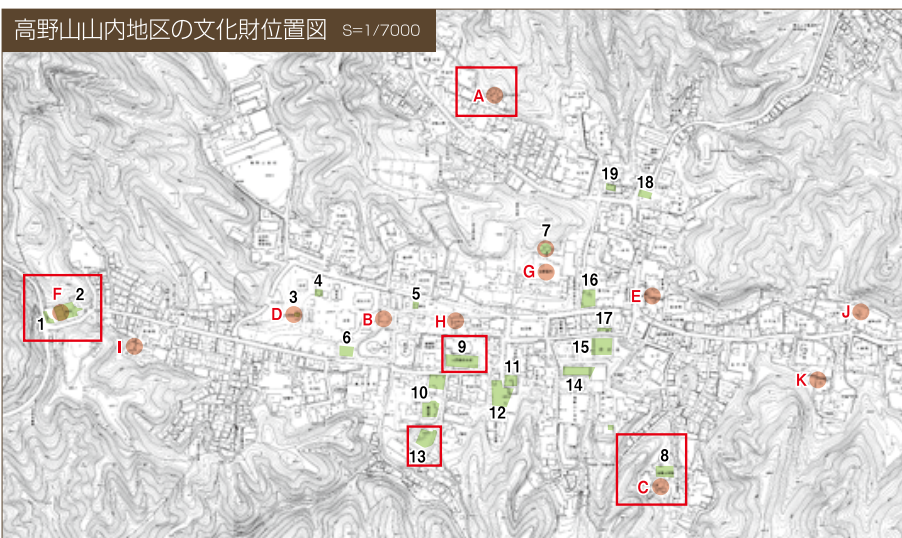


図1 金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具出土地点

金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具出土地点

1. 指定の概要

種別（区分） 有形文化財（美術工芸品・考古資料）

名称（員数） 金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具 135 点

- ①金剛峯寺大門（史跡金剛峯寺境内）出土品：賢瓶^{けんびょう} 1 点、輪宝^{りんぼう} 2 点、櫛^{けつ} 2 点、五色の石 5 点、土師器皿 7 点
- ②徳川家霊台（史跡金剛峯寺境内）出土品：家康霊屋：輪宝 8 点、櫛 3 点、秀忠霊屋：輪宝 6 点、櫛 3 点、帰属不明：櫛 9 点
- ③金剛三昧院（史跡金剛峯寺境内）出土品：賢瓶 1 点、中国銭 18 点、台座石 1 点、土師器皿 24 点
- ④高野山霊宝館八大童子ほか保存施設発掘調査地（金剛峯寺遺跡）出土品：賢瓶 1 点、内容物が墨書された紙包 16 点
- ⑤「宝性院跡」教化研修道場発掘調査地（金剛峯寺遺跡）出土品：折敷^{おしき} 2 点、京焼施釉陶器皿 23 点

出土品の時期

調 査 地 点	地鎮・鎮壇種別	推 定 年 代
高野山霊宝館八大童子ほか保存施設発掘調査地	地鎮	16 世紀後半～
金剛三昧院（客殿及び台所）	地鎮	16 世紀後半（前身建物） 17 世紀前半（～現在）
徳川家霊台（家康霊屋・秀忠霊屋）	地鎮・鎮壇	17 世紀前半
金剛峯寺大門	地鎮・鎮壇	17 世紀末～ 18 世紀初頭
「宝性院跡」教化研修道場発掘調査地	屋敷地取作法	17 世紀末～ 18 世紀初頭

2. 指定品について

①金剛峯寺大門（史跡金剛峯寺境内）出土品

金剛峯寺大門は、高野山の西端に位置する高野山の総門となる。前身建物は貞享 5 年（1688）に消失したが、現在の建物は宝永 2 年（1705）に落慶法要が行われている。

解体修理工事に伴い基壇内の元禄叩き面の発掘調査が昭和 58 年に実施された。この発掘調査において大門の中心部分では方形の土坑が、その梁間方向で中軸上にあたる東西それぞれには円形の土坑が検出されており、現在の大門再建時の地鎮・鎮壇遺構が検出された。

方形土坑は一辺約 1 m、深さ約 0.6 m を測り、土坑下層では中心に 1 枚とそれを取り囲むように円形に 6 枚の土師器皿が埋置されており、そのうち一枚には盛物と考えられる炭化物が遺存していた。土師器の下位からは、中央 1 点、東西南北の各方に 4 点の円礫が置かれていた。円礫は梵字^{ぼんじ}による種字が墨書されたもので、それぞれ色合いが異なっており、五色を意識したものとみられる。五色の石は中央が白色で大日如来の種字「バン」を、南方は黄色で宝生如来の種字「タラク」を、西方は赤色で阿弥陀如来の種字「キリーク」を、東方は青色^{あしゆく}で阿閼如来の種字「ウン」を墨書しており、北方は黒色で判別できないが不空成就の種字「アク」が推測されている。これらの種字の配置から五色の石は、金剛界の五仏を示していると考えられる。

この五色の石の下部から青銅製の賢瓶が出土している。賢瓶の身は高さ 15.1 cm、口径約 7 cm を測る大型品である。頸部境及び脚部境に二条の太筋の突線を巡らせる。蓋は、宝珠形^{ほうじゆ}の摘みがつく。

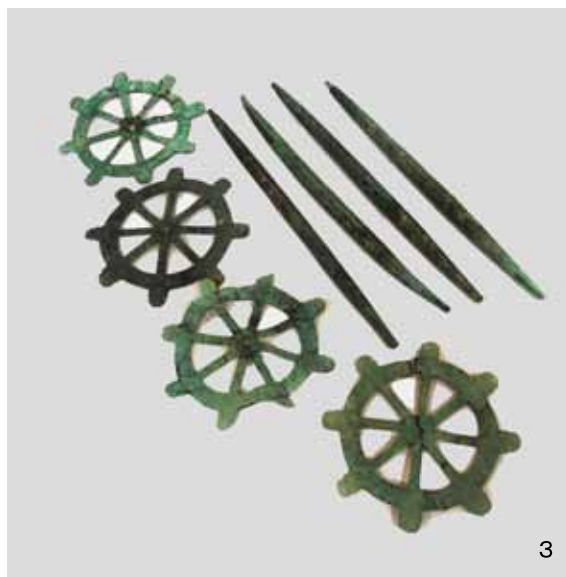


写真1 金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具

(1：金剛峯寺大門出土地鎮・鎮壇具、2：金剛峯寺大門出土五色の石、3：徳川家霊台出土鎮壇具

4：金剛山三昧院出土地鎮具、5：金剛峯寺遺跡（高野山霊宝館）出土地鎮具、6：金剛峯寺遺跡（宝性院）出土屋敷地取作法）

発見当時は賢瓶外面には五色の紐が遺存しており、縦・横に十文字にかけられた状態で出土した。賢瓶には内容物が遺存しており、五宝（金・銀・^{るり}瑠璃・水晶・^{ひすい}翡翠）、五穀（米・麦・小豆・^{けし}罌粟）が確認される。このほか、有機物が遺存しており五香または五薬とみられる。以上の中央の土坑出土品は地鎮に際して埋納された地鎮具とみられる。

また、中央の土坑の東西に位置する2基の円形の土坑からは、それぞれ一組の輪櫛が出土しており鎮壇の実修に伴い埋納されたものである。輪櫛は土坑の中央に櫛を立て、その上に輪宝を載せた状態で出土している。櫛は輪宝を載せる根の部分と芯部分からなり、芯には鑄出した銅板をかきめて組み合わせ、上下の連弁と鬼目からなる各部位を作り出したもので、全長24.2cmを測る。輪宝は肉厚の銅板を打ち抜き、八方に剣形の峰をもつ八峰輪宝である。

②徳川家霊台（史跡金剛峯寺境内）出土品

徳川家霊台は家康霊屋（薬師堂）、秀忠霊屋（位牌堂）の2棟からなり、家康霊屋の扉彫刻に寛永18年（1641）の墨書が、秀忠霊屋の^{はねぎ}枯木に寛永10年（1633）の墨書があり、17世紀前半の寛永年間に落成したとみられる。

昭和36年から昭和37年に行われた建造物の半解体修理に際して、建物建立に伴う地鎮・鎮壇具が発掘された。鎮壇具は、各霊屋の雨落^{かすら}葛石の外側に位置する四隅と四面振分位置の計8カ所に櫛を立て、その上に輪宝を載せた状態で出土している。

櫛は青銅製で、長さ30.0～30.2cmを測る。八角形の棒状で先端部分に輪宝を載せる根が認められ、根の下端には突起により台座を作り出す。柄部は縦方向の直線文2段、蓮弁文上下2段、二重円弧文による鬼目、蓮弁文上下2段、直線文2段を横方向の直線文で区画し、櫛の各部を表現する。文様は、^{たがね}鑿による蹴彫りにより線刻している。

輪宝は1mmの銅版を打ち抜いたもので、八方に三鉈をあしらった三鉈輪宝である。表面には、櫛同様に断面三角形の鑿による蹴彫りにより線刻している。

櫛の輪宝を載せる根の部分は、大きく曲がるものが多い特徴がある。また輪宝も櫛に装着する中心孔から外側にかけて、打圧変形が認められる。本来、鎮壇に際しては、槌により櫛の峰を地面に打ち付けるとされており、鎮壇供養に際し打ち付けることにより変形したものと考えられる。また、家康霊屋の中央部分床下から青銅製の賢瓶が出土している。

③金剛三昧院（史跡金剛峯寺境内）出土品

金剛三昧院客殿及び台所の解体修理工事に伴い建物基礎の発掘調査が行われた。現在の客殿及び台所は江戸時代前期のものと考えられているが、発掘調査により15世紀前半～16世紀後半と考えられる前身建物の存在が明らかになった。このうち客殿中央の「持仏の間」の南側では、16世紀後半の前身建物に伴う地鎮土坑を検出している。

地鎮土坑の上面からは18点の中国銭が出土しており、その下層約0.3mで鎮石とみられる扁平な自然石が出土した。鎮石の直下からは賢瓶が出土しており、台座石の上に据えられていた。また、賢瓶の周囲には、土師器皿を五枚一組にして東、西、北、南に2カ所の計5組が配置されている。

賢瓶は青銅製の身に鉄製の蓋を被せている。賢瓶の身は高さ11.8cmで垂字形を呈し、頸部境及び脚部境に突線2条を巡らせる。蓋は扁平で摘みを持たず、側面には輪花状縦方向の窪みを巡らせている。外面には布の痕跡が残り、四方を五色の紐で十文字に縛った痕跡が認められ、その状況は

儀軌書『^{かくぜんしょう}覚禪鈔』にある賢瓶図のとおりである。

賢瓶には内容物が遺存しており、内容物には五宝（金箔・銀箔・^{はり}玻璃（ガラス）・水晶玉・真珠）、五香（^{じんこう}沈香・^{びやくだん}白檀・^{うこん}鬱金）、五薬（^{かみのや}赤箭）、五穀（米・大麦・小麦・小豆・稗）のほか、これらを包んでいたと考えられる和紙片が存在する。

台座石は砂岩製の一石五輪塔の地輪を半裁し転用したものである。側面に大日如来の種字「ア」と「応永二四年（1417）三月日」と彫り込まれている。台座石の上面には、賢瓶底部にある五色の紐の痕跡が残る。土師器は16世紀後半とされる。

中国銭は北宋銭、明銭、南唐銭であり、寛永通寶が鑄造される寛文10年（1670）以前のものとみられる。

④霊宝館八大童子他保存施設発掘調査地（金剛峯寺遺跡）出土品

霊宝館八大童子他保存施設建設に伴う発掘調査において、室町時代から江戸時代の最下層遺構面で検出された地鎮土坑 SX988 から地鎮具が出土している。出土遺構からの詳細な年代は明らかではない。SX988 は直径約 0.5 m の円形土坑であり、賢瓶は土坑中央のやや北側に傾いた状態で出土した。SX988 の対角上には柱穴、礎石は確認されておらず、建物は削平を受けているようである。

賢瓶は頸部境と脚部境に2条の突線を巡らせる。蓋の端部は欠損しているがT字形の摘みをもち、下から留め具を差し込む。賢瓶の中には、内容物が墨書された紙包み16点が封入されていた。紙包みのうち、15点は約2cm四方の正方形であり、五宝（金・銀・真珠・瑠璃・玻璃）、五薬（人參・^{ふくれい}茯苓・^{いししょうぶ}赤箭・^{ごおう}石菖蒲・^{ちようじ}牛黄）、五香（^{ちようじ}丁字・^{りゅうのう}白檀・鬱金・^{りゅうのう}沈香・龍腦）が確認できる。また、阿弥陀如来の種字「キリーク」の墨書がある紙包み1点が出土しており、麦、米、豆、粟または稗が出土していることから五穀を封入したとみられる。以上の内容物は封入物が墨書されており、内容物を伺い知ることができる貴重な例である。墨書の字体は中世末期のものに近く、賢瓶の形状も根来寺遺跡出土例に近く古い特徴をもつ。

⑤教化研修道場発掘調査地「宝性院跡」（金剛峯寺遺跡）出土品

教化研修道場建設に伴う発掘調査において「宝性院跡」に関わる本堂と推測される掘立柱建物 SB01 を検出している。SB01 の周囲には四隅とその中央には土坑を穿ち、東西 36m、南北 26 m の範囲を画している。各土坑には折敷を据え付け、折敷上に皿5枚を賽の目状に並べている。皿の上には「盛物」と思われる炭化物が遺存するものもある。

皿は京焼施釉陶器であり、重ね焼きのハリが残る。折敷は檜材を用い、30cm四方で隅を切ったものである。周囲には高さ2.9cmの立縁を釘により固定している。

これらの遺構は「屋敷地取作法」を実修したのと考えられている。宝性院は真言宗小野流における中院流の本家であり、中院流の儀軌に則った地鎮が行われたとみられる。「屋敷地取作法」が明らかになった例としては稀であり、実修された作法を遺構から復元できる。また、皿については施釉陶器であり、通常の作法で用いられる土師器とは異なる。



写真2 金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具出土

(1：金剛峯寺大門出土地鎮具、2：金剛峯寺大門出土鎮壇具、3：徳川家霊台出土鎮壇具 4：金剛山三昧院出土地鎮具)

3. 指定品の価値について

地鎮及び鎮壇については、当初はそれぞれ執り行われていたが、11世紀以降、次第に「地鎮鎮壇合行法」として一度に執り行われることが多くなる。しかしながら、以上の例は地鎮及び鎮壇が別個に執り行われた例であり、真言密教の儀軌に則った地鎮及び鎮壇を明確に表す事例であるといえる。

また、出土状況、有機物及び使用痕などの遺存状況が良好である点が、他の出土品と比較して特筆される。一方で、各々の地鎮及び鎮壇ではその修法や用いられる法具にわずかな差異が認められ、これらは地鎮及び鎮壇供養を執り行う阿闍梨に伝えられた口伝、格式及び時期の違いを表すものと考えられる。

以上の出土品は、口伝や文献で伝えられた、真言密教の儀軌を如実に示す考古資料であり、その中心的な教義の場である高野山金剛峯寺境内の重要施設で発見されていることから貴重な資料といえる。

4. 真言宗の地鎮鎮壇作法

①真言宗における法流

真言宗各派には、仏前作法を執り行うにあたり、様々な作法が存在し、その作法は「法流^{ほうりゅう}と呼ばれる流派に分かれている。また、法流^{しょうぼう}は聖宝(832-909)を流祖とする「小野流^{りゅうそ}」と、益信(827-906)を流祖とする「広沢流^{ひろさわりゅう}」に分かれ、さらにそれぞれ細分派し、「野沢十二流^{やたくじゅうにりゅう}」などと呼ばれる。これら法流は、阿闍梨になるための修行の際、特に修法を執り行う仏具、いわゆる密教法具の使用方法などの作法に違いがあり、法流毎の特徴を有している。高野山では、かつて多くの法流が存在したが、現在は「中院流^{ちゅういんりゅう}」が主要な法流となっている。

②修法

僧侶が執り行う仏事には、「修法」と呼ばれるものがある。例えば、節分に一年の無病息災などを祈る「星供養法（星供）」、各種の祈願を祈る「不動護摩法」など、堂内、屋内で執り行われるものもあれば、仏堂や建物の建築に当たって執り行われる「地鎮法」「地鎮鎮壇法」「屋敷地取作法」「土公供作法」など、屋外で執り行われるものもある（写真3、図2～4）。

各種の修法には、実修にあたり、それぞれテキストとなる『次第』がある。また修法を行うには、師僧から修法の伝授を受ける際、「口伝」もともに教授される。さらに実修の現場では、『次第』や「口伝」の情報にはない、阿闍梨の「意楽」というものがある。「意楽」とは、修法の導師を務める阿闍梨の判断で、修法の『次第』や「口伝」に従いつつ臨機応変な対応をすることである。このことから、『地鎮鎮壇法』を修した遺構、遺物の検出時、真言宗の法流によるが、各々に微妙な差違が生じているのは、このような「口伝」や「意楽」が反映しているものと考えられる。

③事供養と理供養

修法での仏前供養は「事供養（事供）」と「理供養（理供）」から構成され、前者は密教法具を用い、供養する方法、後者は印明観念をもって供養する方法である。

以上の事柄は、考古学上、遺構や遺物から観察できる事象には反映されない部分もあるが、遺構・遺物を通じて、当時執り行われた地鎮・鎮壇跡や行為の復元を試みる場合には、このような宗教的背景や事柄が存在することを理解しておく必要がある。

参考資料

- 財団法人高野山文化財保存会 1962『重要文化財 金剛峯寺徳川家霊台家康霊屋・秀忠霊屋修理工事報告書』
水野正好 1982「屋敷地取作法と地鎮の考古学 - 高野山宝性院跡発見の遺構を巡って -」『高野山発掘調査報告書』
元興寺文化財研究所 1982「宝性院跡 - 教化研修道場建設に伴う発掘調査 -」『高野山発掘調査報告書』
松田正昭 1984「和歌山における地鎮・鎮壇の遺構」『古代研究』29・29 特集地鎮・鎮壇 元興寺文化財研究所
社団法人和歌山県文化財研究会 1986『重要文化財 金剛峯寺大門修理工事報告書』財団法人高野山文化財保存会
関西文化財研究会 2005『高野山金剛峯寺発掘調査報告書 - 国宝八大童子他 115 体保存施設建設に伴う発掘調査』
公益財団法人和歌山県文化財センター 2013『重要文化財 金剛三昧院客殿及び台所ほか 1 基修理工事報告書』財団法人高野山文化財保存会
鳥羽正剛 2002「土釜埋納遺構にみる真言宗の地鎮修法—土公供作法および口伝からの考察—」『中世の地鎮と銭貨』（第1分冊）出土銭貨研究会
鳥羽正剛 2006「真言密教の地鎮め遺構「土釜埋納遺構」に関する修法復元—『土公供作法』および「口伝」からのアプローチ—」『ヒストリア』第198号 大阪歴史学会



写真3 『土公供作法集 中院』

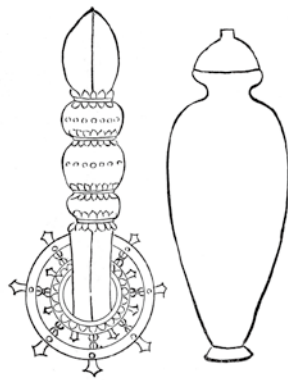


図2 地鎮鎮壇法指図

(以下、『土公供作法集 中院』より転載)



図3 『屋敷地取作法』指図

地祭鎮瓶輪撮事 有快傳
 地鎮鎮瓶認結事
 一紙ヲ方二寸ニ切り二十枚ハガリ五枚
 足打ニ並ナ金銀瑠璃真珠水精以上五
 寶五ツニ裹之其五又三寸四方ナル紙
 惣裹其上一糸結上ニ五寶ト書
 付ル也五香五藥五穀如五寶次此
 四裹白絹ヲ以テ惣包シ瓶ノ中ヘ入レ
 蓋ヲ其上一五色ノ糸ヲ以テカラクル也
 先糸ヲ瓶ニ立サマニ上ヘヨリカケテ下ノホ
 ソキ所ニテ一ドマワシテ次ニ瓶ノ底ヘ十
 文字ニ掛テ上ヘマゲテ又上ノクビニテ一ドマ
 ワシ小口ニテ又十文字ニ掛ルニ少シロ
 傳アリ其後真結ニシテ七寸許置切也

図4 「地鎮鎮瓶輪撮事」



写真4 平成27年に再建された伽藍中門



写真5 賢瓶・五色糸結束状況



写真6 賢瓶・御幣埋納状況



写真7 輪宝・櫛・御幣埋納状況